

国際教育学部 2024 年度ティーチングポートフォリオ

氏名	職位
鈴木光男	教授
飯田真也	教授
藤田美枝子	教授
和久田佳代	教授
DonaldPatterson	教授
竹本石樹	教授
福重浩之	准教授
内山敏	准教授
Morten Vatn	助教
杉山沙旺美	助教
渡邊拓真	助教

氏名 鈴木 光男

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（SC・鈴木）	5	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	21
図画工作科指導法	21	総合演習Ⅰ（SC・鈴木）	4
保育内容（表現）	36	教職実践演習（幼・小）	28
図画工作	39	こどもと表現	41

2. 理念

倉橋惣三「驚く人であるということにおいて教師は詩人と同じである」という言葉通り、アートとしての教育を大切にしている。双原因性感覚に立った学修（習）者と指導者が相互に影響し合う創造的な学習モデルを基本としている。

3. 方法

教育現場の実践をもとにしながら、最新の教育思潮や国の動向を踏まえた理念や教育方法を授業内に取り込む。学生と共に思考し、検討・考察するようにする。

4. 成果

成果物（レポートや指導案など）と共に模擬保育や模擬授業で学生のスキルや姿勢を確認している。授業開始時はそれまでの学修の振り返りを大切にして導入し、学生個々人の課題意識に立った授業構成・内容とする。

5. 改善

総括的評価としての授業評価ばかりではなく、毎回のリアクションペーパーに形成適評かを視点とした評価欄を設けて、その都度ふり返り、次回の授業に活かすようにしている。

6. 教育活動

研究フィールドとなるカンボジアや近隣の地域、また小学校や中学校と重なるような授業（国際支援アクティブラーニング・地域実践アクティブラーニングなど）実践を進めている。また、学校運営協議会の会長や市民大学の代表を務め、それぞれの事業に学生を派遣するなどして現場に基づいた教育研究活動を展開している。

氏名 飯田 真也

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（SC・飯田）	3	教職概論（国際教育学部）	43
教育方法・技術論	36	算数科指導法	27
生活	43	総合演習Ⅰ（SC・飯田）	1
生活科指導法	21	算数	33
理科	30		

2. 理念

受講者が小学校及び特別支援学校教諭として教壇に立つことを想定して、小・中学校や教育行政職の経験を踏まえて教育実践力を高める授業を行う。

3. 方法

次のように科目の特徴に沿った授業方法を実施する。

- ①教科：教科書の背後にある理論的内容を問いとして考察
- ②教科指導法：模擬授業を中心とした授業力の向上
- ③教職教養科目：ペアやグループ活動を活用した理解の深化

4. 成果

教職教養科目において、受講者の実態に応じて、課題問題やケーススタディにおいて「体感型ジグソー法」を開発し、理解深化を図った。

教科指導法科目において、実践型模擬授業形式を工夫し、指導技術の向上を図った。

5. 改善

教員採用試験等外部評価を想定すると、GPAの上昇は厳しい。

そのため特別再試験や内容理解を促進する課題によって理解の深化を図っている。

6. 教育活動

図書館学生スタッフの活動充実を図り、他学生への読書推進を通じた内容理解深化等での環境整備とサポート

氏名 藤田 美枝子
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
臨床心理学概論	48		

2. 理念

学生が大学で学ぶ過程で大切なことは、「自分自身で問いを考えていく」という点にあると思われる。このことが、それまで受けてきた教育とは大きく異なる点であろう。学生が受け身でなく、自分から能動的な学びが可能となるような教育を目指したい。また、教員からの一方向の授業だけでなく、教員や他の学生との対話から学ぶことが重要だと考えている。

3. 方法

臨床心理学の成り立ちおよび代表的な理論について、基礎的かつ全般的な理解を深めることを目指す。そのために、授業で学んだことを振り返りながらリアクションペーパーへまとめる作業を通して学びを深める。さらに、その内容を次回の授業でも共有することでもう一度疑問点等を確認する。

4. 成果

臨床心理学の成り立ちおよび代表的な理論について理解できたことが、各学生のリアクションペーパーからわかった。特に、各理論ごとに事例等を使ってグループ討議等を取り入れたことが、学生の理解を深めることにつながったと思われる。

5. 改善

学生の興味や意欲をより引き出せるような工夫を引き続き考えていきたい。グループ討議は有効であると思われるため、さらに授業の中に取り入れていく。

6. 教育活動

大学院共通科目（心理学概論）の授業、大学院社会福祉学研究科の授業と院生の論文指導。

氏名 和久田 佳代

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
レクリエーション概論	88	総合演習Ⅱ（SC・和久田）	7
保育内容（健康）	35	基礎演習Ⅰ（EC・和久田）	15
体育	43	こどもと健康	43
レクリエーション概論	106	地域実践アクティブラーニングⅠ	110
地域実践アクティブラーニングⅡ	16	地域実践アクティブラーニングⅢ	8
総合演習Ⅰ（SC・和久田）	3	アダプテッド・スポーツ	21
乳児保育Ⅱ	23	基礎演習Ⅱ（EC・和久田）	15
体育科指導法	22		

2. 理念

神様から愛され、許されている存在であり、成長・発達する存在である学生とともに、学び合い、切磋琢磨し、生涯にわたって、成長・発達できるよう努める。聖隷の先達との出会いから学ばせていただいたことに感謝し、微力ながらその継承に尽力する。

3. 方法

対象の理解に努め、学びへの動機づけ、学び合いを大切に、学生がアクティブラーニング（主体的、対話的で深い学習）できるようにする。Society5.0を見据え、WebClassやGoogleClassroomを活用し、学びを可視化し、蓄積していけるよう働きかける。

4. 成果

総合演習Ⅱにおいて、WebClass 掲示板を活用し、進捗状況を主体的に把握し進めるようにした。

5. 改善

2025 年度新規科目「発達支援総論」「発達支援演習」において、学生がどのような知識を得ているのかを共有し（共有の課題）、実習や現場で求められていることは何かを探究する（ジャンプの課題）。

6. 教育活動

1, 3, 4 年生アドバイザー

地域実践 AL（アダプテッドスポーツ）担当

パラだに顧問

氏名 Donald Patterson

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
英語Ⅴ	3	海外研修	10
英語Ⅲ（看護英語）	31	総合演習Ⅱ（SC・Patterson）	2
英語Ⅲ（社会福祉学部・国際教育学部）	16	英語Ⅱ（月 5）	27
英語Ⅱ（月 6）	23	英語Ⅱ（火 1）	31
海外研修	4	こどもと英語	33

2. 理念

My goal is to create an active learning environment. I want to create lessons for students to not only learn English, but to study in English. Plus, I will continue to devise activities that use technology effectively. 私の目標は、アクティブラーニングの環境を作ることです。英語を学ぶだけでなく、英語で勉強できるような授業を作りたいですね。さらに、テクノロジーを効果的に使ったアクティビティを考案していきたいと思います。

3. 方法

I aim to foster an active learning environment through task-based learning with interesting content, and a variety of communicative activities using pair-work and group-work. 興味深い内容のタスクベースの学習や、ペアワークやグループワークを使ったさまざまなコミュニケーション活動を通じて、アクティブな学習環境の醸成を目指します。

4. 成果

Student class evaluations have been positive. Student comments have also been positive. 学生の授業評価はすべてのクラスで良好な結果が得られています。また、学生からのコメントも好評です。

5. 改善

While student evaluations have been positive, it is important to keep lessons fresh. This means updating content, trying new activities, and using technology as appropriate. 授業評価は良好ですが、授業を常に新鮮に保つことが重要です。つまり、内容を更新したり、新しいアクティビティを試したり、適宜テクノロジーを活用したりすることです。

6. 教育活動

To keep my classes fresh, I attend English teaching conferences to learn new teaching methods and speak with English textbook publishers to make sure students' have appropriate textbooks. In my research, I study about learner motivation in order to help students develop a positive attitude towards English. I recently published a paper about university students' learning beliefs in English and nursing and a paper about testing the validity of a questionnaire designed to measure learned helplessness. You can see the URLs below. 授業を新鮮に保つために、私は英語教育に関する会議に参加し、新しい教授法を学んだり、英語の教科書出版社と話をし、学生が適切な教科書を使っているか確認したりしています。私の研究では、学習者の動機に関する研究を行い、学生が英語に対して前向きな態度を持つようサポートしています。最近、大学生の英語と看護における学習に対する信念に関する論文と、学習型無力感を測定するための質問紙の妥当性をテストする論文を発表しました。以下に URL をご覧いただけます。 "University Students' Mindset...": <https://doi.org/10.1177/00332941241232895>
"Validating the Learned Helplessness Questionnaire...": <https://doi.org/10.12973/ejper.7.4.233>

氏名 竹本 石樹

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
情報処理(月 5・竹本)	49	理科指導法	21
プログラミング教育 I	12	情報処理	30
総合演習 I（SC・竹本）	6		

2. 理念

実践的指導力を高める教育を行う

3. 方法

アクティブラーニングを行う

→模擬授業を創り上げるあげの中で試行錯誤させる。

→教材開発を行う中で試行錯誤させる。（Scratch、AkaDako を使ったプログラミング）

4. 成果

試行錯誤した取組をした。

集中して取り組んだ。

5. 改善

グループ編成方法を改善する。

社会の進化に応じた教材を発見する。

6. 教育活動

アドバイザー

模擬授業サークル

氏名 福重 浩之

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
文学	18	日本語表現法	41
インターンシップⅠ（EC）	22	基礎演習Ⅰ（EC・福重）	14
教育実習指導（21SC・幼）	15	教育実習指導（22SC・小）	13
教育実習（幼・小）（21SC・幼）	15	教育実習（幼・小）（22SC・小）	13
国語科指導法	28	小学校インターンシップⅡ	21
文学	93	日本語表現法	104
総合演習Ⅰ（SC・福重）	4	インターンシップⅠ（SC）	2
インターンシップⅡ（SC）	1	基礎演習Ⅱ（EC・福重）	14
国語	33		

2. 理念

学修や活動の主体を学生側に置き、自ら知識を獲得していくことを中心とする。

3. 方法

小集団活動を中心に、協働しながら課題を解決していく授業に取り組んでいる。

4. 成果

他者の考えと自らの考えを結びつけることで、思考過程が豊かに深くなっている。また、自らの考えを他者に伝えようとする姿勢がよく見られる。

5. 改善

小集団でまとめる方法とプレゼンテーションする方法を改善していきたい。

6. 教育活動

読解力プロジェクトに取り組み、文章を要約する力を育て、書く力にも繋げていく。

氏名 内山 敏

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（SC・内山）	6	心理学概論	98
教育心理学（教育・学校心理学）	57	総合演習Ⅰ（SC・内山）	5
公認心理師の職責	24		

2. 理念

心理学及びその近接領域の学問に対する興味や探究心を芽生えを刺激し、実践的で幅の広い知識をもった人間を育成する。

3. 方法

授業において教員が示す情報は単なる知識としてではなく、現実のできごとと重ね合わせて想像できるような情報として提供する。

常に学生の理解度を汲み取りながら授業を構成するために学生との双方向の関係を重視する。主にはリアクションペーパーを利用して学生の疑問の解消や発展的な知識を提供する。

4. 成果

学生のリアクションペーパーが多く寄せられたため、方法の有効性を実感している。

5. 改善

学生の授業への態度について、自身の言動が他者の学習環境に影響を与えうるといった客観的自己覚知の重要性に訴えかける。それにより授業の重要性や快適性を上げ、学びへの動機づけを後押しする。

6. 教育活動

学生からの学業や生活に関する相談は積極的に関与するが、学生の自己決定力の成長を促すことに力点を置く。

氏名 Morten.Vatn

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
国際バカロレア教育入門	51	国際バカロレア教育方法論	7
国際バカロレア教育学習アセスメント	7	国際バカロレア教育概論	5
国際バカロレア教育課程論	5	国際バカロレア教育総合演習	7

2. 理念

「思考する教室」を育むために — 今年度の座右の銘：「共に学びを創造する教育者であること」：これは、「教師自身も学習者である」という姿勢を大切にしたい、という思いから掲げたものです。私は、教育とは単なる「知識の伝達」ではなく、学習者が自ら問いを立て、他者と関わりながら思考を深め、世界と意味あるつながりを築いていく営みだと考えています。そのような学びの場を創造するために、教師自身も学び続け、変化し続ける存在である必要があります。国際バカロレア（IB）教育が重視する「探究心」「エージェンシー（主体性）」「自己効力感」は、私の教育観の根幹にあります。教師は「教える人」から「学びを支える人」へと役割を再定義し、時にはファシリテーター、時にはジェネレーター、そして時にはモチベーターとして、学習者一人ひとりの可能性を引き出す存在でありたいと考えています。

昨年度の「国際バカロレア教育入門」の授業では、従来の教室規範や一方向的な学びを期待する学生の姿に直面しました。問いかけても対話が生まれにくく、学びが表層的な理解にとどまってしまう場面が多く見られました。この経験から、こうした「教室文化」を問い直し、教師と学生の両者がそれぞれの行動を変えていく必要があることを痛感しました。そして私は、「思考する教室（Thinking Classroom）」の実現が、まさにこれからの教育に不可欠であると確信しました。「思考する教室」とは、正解を教える場ではなく、思考プロセスを育む問いが生まれる場です。そこでは、「これで合ってますか？」のような思考を促さない問いや、教師の一方的な答えを避け、学習者同士が問いを深め合う文化を大切にします。学習者が安心して思考し、対話し、創造に挑戦できる空間をつくることこそが、教育者の役割だと考えています。私は今後も、すべての学習者が自分の声を持ち、互いに学び合い、高め合える学習文化の構築を目指します。そして、学習者の知的・感情的な成長を支える「場」を丁寧に築いていくことが、私の教育実践の中心であり続けるよう努めていきます。

3. 方法

今年度の授業では、より意図的に「思考する教室（Thinking Classroom）」の構築に取り組んでいきます。「Thinking Classroom」とは、単に知識を受け取る場ではなく、学習者が自ら問いを立て、他

者と対話しながら、意味を再構築する学びの場です。そのような深い学びを実現するために、以下のような具体的なアプローチを計画しています。

まず、QFT（Question Formulation Technique）を導入し、学習者が自ら問いを立てるプロセスを重視します。これは、探究の起点としての「問い」の質や教師の「応答」の質を高めると同時に、学習者のメタ認知を促進する手段として活用します。

次に、身体の動きや空間の使い方にも工夫を凝らします。固定的な座席配置から脱却し、思考や対話が自然に生まれるようなレイアウトや活動形式を設計することで、教室そのものを「学びを誘発する空間」として捉え直します。

また、ICT や AI ツールの活用により、思考の可視化や多様な視点の共有を可能にします。たとえば、協働的な編集・記録活動、リアルタイムなフィードバック、音声やビジュアルによる振り返りなどを通じて、個別化と社会化が両立する学習環境を整備していきます。

さらに、授業内では様々な「思考プロセスを可視化するルーチン」を頻繁に取り入れ、自己評価やピア評価の機会も定期的に設けます。学習の証拠としてポートフォリオを活用し、学習の記録・モニタリング・フィードバック・フィードフォワードを通して、教師と学習者がともに成長を振り返るサイクルを大切にしていきます。

こうした一連の取り組みを通じて、学習者同士が相互に支援し合い、共同で思考を深めるような授業環境を目指します。そして最終的には、「問い続ける力」や「学びの意味を自ら見出す力」を育むことを目標としています。

4. 成果

ポートフォリオ（学習の証拠）は、学習プロセスと成果を可視化し、指導と評価をつなぐための重要な手段です。私はこのポートフォリオの活用に加えて、毎回の授業冒頭に「前回の振り返り」を行うことを大切にしています。ただし単なる振り返りにとどまらず、その「振り返り」につながる予習のあり方にも重点を置いています。学習者が前回の学びを自ら再確認し、それを起点として次の学びに向かえるようにすることで、継続的な成長への意識を育てることを目指しています。これらの記録は、授業内容の改善やルーブリックの調整にも役立てています。

また、こうした実践は個人ではなくチームで共有・検討しながら進めることを大切にしており、教員間の協働的なカリキュラム開発や評価の整合性にも貢献しています。今後の課題としては、学習者に対して「今どこにいるのか」「次にどこを目指せばよいのか」がより明確になるような、形成的かつ個別的なフィードバックを意識的に強化していくことです。そのために、一人ひとりの進捗やスタイルに応じた評価機会を複数・多様に設け、知識の再生だけでなく、応用・創造・内省といった多面的な学びを捉える努力を続けていきたいと考えています。

5. 改善

学習者の主体性をさらに高め、思考する教室を実現するために、以下の 3 点を中心に改善を図ります：

1. 形成的フィードバックの充実とタイミングの最適化：学習者が「自分が今どこにいるのか」を把握できるよう、個別フィードバックをよりタイムリーに、具体的に行います。特に、学習過程の中で軌道修正が可能となるような「フィードフォワード」を重視し、成果ではなくプロセスに光を当てた対応を増やしていきます。

2. ルーブリックと評価基準の透明化・共有: 学習者が自己評価に主体的に取り組めるよう、評価基準をより明確に提示し、授業内での解説や実例を通じて理解を深めます。また、ルーブリックは教員だけのものではなく、学習者と共有・活用できる「学びの道しるべ」として位置づけ直します。
3. 学習における心理的安全性の確保と支援の可視化: 探究や創造を促す環境には、失敗や挑戦が安心してできる雰囲気が不可欠です。そのため、授業内外で「困ったときにどのようにサポートが得られるか」を明示し、学習者が助けを求めやすい関係性づくりを意識的に進めます。また、ペアやグループでの相互支援の仕組みも強化し、「教え合い」「学び合い」が自然に生まれる構造を設計します。

6. 教育活動

今年度は、昨年度に引き続き、実践的かつ多層的な教育活動を展開しながら、その質の向上と目的の明確化に重点を置いて取り組んでいます。特に、以下の3点において改善と深化を図っています。

1. 年齢や発達段階に応じた「教育的関わり」の探究: 小学校やこども園での定期的な実践に加え、現場の先生方とのインタラクションを通じて、学生が年齢や発達段階ごとの関わり方を体験的に学ぶ機会を充実させています。観察・記録・振り返りを重視し、活動後には「子どもの声にどのように応えるか」「どのような支援が効果的だったか」といった視点でリフレクションを行い、教育的判断力の育成につなげています。
2. 学外実習と接続した「総合演習」の再設計: 現場訪問を単なる「見学」ではなく、「問いを持って臨む探究的実習」として位置づけ直しています。事前にリサーチ課題や観察ポイントを設定し、実習後はワークショップ形式での共有やプレゼンテーション、SWOT 分析などを通じて学びを振り返ります。これにより、単発的な体験を深い学びへと昇華させることを目指しています。
3. 「学びの場を創る力」の育成: 学外だけでなく、大学内でも新しい学びの環境づくり（例: IBEC 教室リノベーションプロジェクト）に学生が主体的に関わる取り組みを進めています。座席配置、空間設計、素材や指導の工夫など、「どのような環境が学びを支えるのか?」という問いをもとに、実際に場をつくる経験を通して、将来の教室設計に必要な視点やスキルを養うことを目指しています。

氏名 杉山 沙旺美

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（SC・杉山）	7	保育内容（言葉）	35
保育内容（人間関係）	35	保育実習ⅠA	26
保育実習Ⅱ	8	保育実習指導Ⅰ（22SC）	26
保育実習指導Ⅱ	8	こどもと言葉	35
総合演習Ⅰ（SC・杉山）	4	保育実習ⅠA	22
保育実習Ⅱ	14	保育実習指導Ⅰ（23EC）	22
保育実習指導Ⅱ	14	保育実践演習	19
こどもと人間関係	40		

2. 理念

「教員と学生が共に学び、共に成長する」「学び続ける人」

- ・理論と実践の繋がりや重なりを実感してほしい。
- ・社会課題や保育に関する諸課題を自分事として考えてほしい。
- ・語り合いの場面で、メンバーに関わらず、自分の意見を持ち発言することと他者の意見に耳を傾けることを実践してほしい。
- ・授業での学びを学生が実践者になった後にも振り返ることができるものにしたい。

3. 方法

- ・（視聴覚教材の使用）乳幼児の育ちのプロセスが理解しやすい視聴覚教材を活用し、乳幼児の視点に立って育ちの意味を考えることができるよう支援した。
- ・（オリジナル資料の作成）スライドおよびオリジナルワークシートを作成した。学生が主体的に講義に参加することをねらいとした。
- ・（ポートフォリオの作成とルーブリックによる評価）毎授業ごとにその時間のまとめや振り返りとなる課題を提示し、その課題やプリント等を挟んだポートフォリオを評価の対象とした。また、事前にルーブリック評価の内容を提示し、学生が授業を振り返り、自らの学びをより深める契機となることをねらいとした。
- ・（体験型学習の導入）栽培活動や探究活動（染物・風の装置）を取り入れ、体験的な学びを意識した内容を取り入れた。また、模擬保育では、学生が保育者役、子ども役、評価者役、全ての立場を経験し、多角的に実践を考える機会を設けた。
- ・（ディスカッションの導入）グループワークやディスカッションの機会を多く設定した。またディスカッションの内容をメモに残し、それを全体に説明・共有することで、学生が講義に主体的に参加することをねらいとした。

・（附属園・子育て広場と連携した演習型の授業の実施）近隣の園と連携し、園見学や保育参加、絵本の読み聞かせ会を行う授業やゼミ活動を実施した。

4. 成果

- ・事例や画像の活用を通して、学生が具体的に実践や子どもの姿をイメージして語りあうようになった。学生の授業の感想の中にも「事例があることで、子どもの姿を具体的にイメージできた」「授業で学んだことが実習中の出来事と重なった」と学びを実感している声があった。
- ・模擬保育の実践やグループワークを多く行ったことが学生に好評であった。授業の振り返りの中で「他の人の意見を聞く機会になった」「そんな考えがあるんだなと視野が広がった」といった声があった。
- ・ポートフォリオについて、前年度の記録を振り返り、学びを?げている姿があった。
- ・授業の振り返りの中で、学んだことを実践することの難しさや学ぶ意味を実感したという声があり、理論と実践の繋がりを考えるきっかけになっていた。
- ・園見学を通して多様な保育実践があることを知ったことで、就職活動の際に、自分が就職を希望する職場についてよく考えるきっかけになったという声があった。

5. 改善

- ・映像教材の効果的な活用。
- ・学生が目的意識を持って取り組めるような導入や講義と演習の組合せ等授業構成の検討。
- ・質問しやすい環境づくりに努め、学生一人一人への対応をより丁寧に行う。
- ・実践現場との連携を深めていく。
- ・科目間、教員間での連携や学習の繋がりを意識した授業の検討。

6. 教育活動

- ・アドバイザー（学生指導、卒業研究指導）
- ・幼稚園教諭・保育士採用試験対策における学生指導
- ・保育ボランティア等の引率等

氏名 渡邊 拓真
職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
保育実習ⅠB	26	幼児理解の理論と方法	35
こどもと環境	35	総合演習Ⅰ（SC・渡邊）	6
保育内容（環境）	35	保育実習Ⅲ	12
保育実習指導Ⅲ	12	保育の計画と評価	31

2. 理念

保育において教育は環境を通して行われるが、大学教育も学生が主体的に周囲の環境と関わり自ら学びとっていくものである。学生が子どもの発達段階を理解する、子どもの遊びや生活を支える手立てを習得するなど、教育者となるために必要な理論や技術を習得することはもちろん、真に求められるのはそれらの土台としての「教育者としての態度や姿勢」の育成だと考える。一人一人の子どもが自由に表現し、主体性を発揮して生活や遊び、学びを展開することを支えることができる、子どもの立場に立った教育を展開する人材の育成を目指す。

3. 方法

教育について考えを巡らせ理解を深めるためには、理論と実践が深く結びつく必要がある。実践を意識して学びを深化させる手立てとして、以下の方法を意識的に用いた。

- ・附属こども園での観察授業の実施?保育実践現場に身を置き、実際に子どもと関わってやり取りしながら、保育者の行為の意図を考える
- ・自然環境（聖隷の森）の活用?実際の保育を想定した環境の利用法や自然環境そのものがもつ力を考える
- ・子どもの遊び場面や葛藤場面の映像視聴?子どもの園での生活や遊びの実態を把握し、子どもの理解を深める
- ・協同的な学びの機会の設定?授業や実習で得られた知識や経験をもとに、学生同士が意見や考えを交えることで学びを深める

4. 成果

- ・学生が実際に園生活を観察することで、子どもと関わることの面白さ、楽しさを感じることに加え、自身が子どもと関わる意味を考えたり、保育に関する知識や技術のさらなる習得を目指すことに繋

がったりした様子であった

- ・保育場面の映像視聴は、複雑な概念や抽象的な内容を視覚的に理解することに役立ったようで好評であった。映像教材を繰り返し視聴することで、学生はより深く考えることができたようであった
- ・グループワークによって他者と意見交換することで自分の考えを整理し、相手の意見から新たな知見を得て理解を定着させる様子が見られた

5. 改善

- ・園での保育参加体験を確かな学びへ繋げるために、参加後に振り返りと共有の機会を設定する
- ・学生が主体的に学びを深められるような探求型アクティブ・ラーニングを実践する
- ・学生とともに授業をつくる意識をもち、リアクションペーパー等を活用して双方向的な授業を展開する

6. 教育活動

- ・アドバイザー（学びの支援や卒業研究指導、進路相談等）
- ・自然環境を用いた保育環境のアドバイス（市内私立保育園にて）